

## 【図書紹介】

# ゲイリー・マッカロック／スティーヴン・コーワン著 『イギリス教育学の社会史——学問としての在り方をめぐる葛藤』 (小川佳万、三時眞貴子監訳、昭和堂、2023年)

高妻紳二郎 (福岡大学) ・ 白幡真紀 (仙台大学)

## 1. 本書の概要とイギリス教育（学）研究上の意義

本書は2023年3月に刊行された直後に本学会に献本いただいたもので、「日本の人文社会科学系の学生・研究者にも、教育学再編に対する課題への示唆、他国との比較、『学際的アプローチ』の本質に迫る機会となろう」という紹介文（出版社による）が添えられた、本学会にも関係が深い著者達による、しかも複数名の本学会会員が翻訳者として刊行に携わった時宜にかなった著作である。特筆すべきは著者のひとりであるゲイリー・マッカロック氏は、1997年に開催された本学会第6回大会（於、早稲田大学）にゲストとして招聘され、そこで「1980年代教育改革の意義」と題する講演をいただくなど、本学会草創期からのお付き合いのある碩学泰斗である。また、昨年の『日英教育研究フォーラム』第26号には、本学会創立30周年にあたってコメントをお寄せいただいた。著者と本学会のかかる関係もあり、編集委員会で急きょ検討し、今号で「図書紹介」として取り上げることにした。

以下、前半で高妻が全体の概要紹介を担当し、後半で翻訳に携わった白幡真紀会員によるご自身の翻訳箇所を紹介と、研究書を翻訳する際に配慮した点や翻訳担当者ならではのご苦労についても併せて紹介していただこうと思う。さっそく、本書の構成をみていこう。

第一章 序論

第二章 学際分野と近代大学

第三章 ロンドン大学教育学研究所——どんな知識の扉も開かれているのか？

第四章 教育学の制度化——教育研究常設会議から英国教育研究協会へ

第五章 教育学の雑誌の様相——『英国教育学ジャーナル』（1952年から現在まで）を中心に

第六章 教育学のテキストの変遷——概説書／総覧／論集／入門書

第七章 学際プロジェクトの試みと失敗——現代文化研究センターの事例

第八章 教育学の危機と協同——教育学研究者へのインタビューから

第九章 21世紀の教育学——「交差する道（学際研究の推進）」を目指すのか？

第十章 結論

冒頭、「日本語版への序文」の中で著者はこう述べる。「日本における教育学研究の歴史と現

在直面している問題に関心を抱いている日本の読者の注目を集めることができれば幸いである」と。教員養成に関わる仕事とイギリスの教育行政・経営に関心をもち紹介者の読後第一感、紹介者が日常的に感じている教育と研究のギャップ——隔靴搔痒のもどかしさ——が言語化されており、すぐに再読したい感覚にとらわれた。その意味でも、著者が想定する読者にとって、まさに期待以上のものであることを記しておこう。引き続いて「はじめに（小川）」で「アカデミック」を寄せ集めた総合的な学問が教育学であると述べ、従来から議論されてきた教育学の「親学問」との関わり方を、イギリスの学問発展史の中に位置づけて綿密に論じていることを本書の特徴のひとつとして指摘している。かかる議論は、現在の日本の教育を考えるうえでキャッチーな「研究と実践の往還」がスローガンとして掲げられ、現場の苦悩の軽減に寄与する研究が歓迎されている状況にかんがみれば、イギリス教育学の展開に即して本書が説く「新しい知識の形成」に資する社会史政治史のケース・スタディは、国が定めたコア・カリキュラムの枠内での教員養成や実践近接への圧力を多方面から迫られている日本の教育学研究者にとって極めて有意義な、かつ貴重なリフレクションの機会を与えてくれるように思う。

どの章をピックアップして読み進めても良いだろうが、例えば第4章では教員養成（教師になるための職業備教育）が、校長による講義と方法学教師の実地授業を主とするものから、主要大学の教育学科における教育学研究が質量ともに拡大したことを受けてアカデミックカラーが濃くなり、資金提供も多くの機関からなされるようになったというイギリスの特色が描かれている。イギリスの戦後教育学の発展の観点からは、日本における教育関連諸学会の発足の時期にも重なっていて実に興味が高まる。「未分化のドロドロ」？（81頁）と翻訳された部分には膝を打った。引き続いての教育学関連の雑誌の変遷や学問的関心の変遷も興味を惹かれるものであった。

「結論」で述べられる「教育学の発展は、目的論ではなく、歴史的に理解される必要がある」（262頁）という指摘は正鵠を得ており、教育学の「学際性」の本質に係る議論とともに、私たちにそれらに常に自覚的であることを促してもいる。さらに、イギリスで今も問われ続けている「なぜ教育学部・教育学科は社会的地位が低いままなのか」という問い（「おわりに」（三時）、267頁）に対する本書の回答も興味深い。また、「教員養成と教育学研究を両端にしたグラデーションのある教育学が制度的に存立したのが日本の事例として考えることができる」（同、268-9頁）のであれば、果たして自身の研究はそのグラデーションのどこに位置づくのかといった自問自答が、本書のサブタイトルに付けられている「学問としての在り方をめぐる葛藤」に直結する思索となるのだろう。イギリス教育学の系譜を解き明かそうとする本書は、本学会会員にとっても一読する価値は極めて高く、必読の書となろう。

高妻紳二郎（福岡大学）

## 2. 本訳書に関わって——訳者のひとりからの視点

先にご紹介いただいたよう、浅学ながらも筆者白幡も翻訳を分担させていただいたため、本訳書について紹介を申し上げ、翻訳にあたっての所感を申し述べたい。

「はじめに」で監訳者の小川佳万氏が述べているよう、本書は「『新興の』教育学を対象として、学問の生成と発展、模索の過程を詳細に論じて」（はじめに V）おり、さらに教育学と他の学問がどうかかわってきたのか、また教育学の観点による「学際的アプローチ」の範囲と本質と

は何かについて議論する。本書一冊でイギリスにおいて教育学がどのような道程で、隣接する学問領域と交わりながら発展を遂げてきたのかについて示唆を得ることが期待できるだろう。

筆者が担当した章は「第6章 教育学のテキストの変遷—概説書／総覧／論集／入門書」である（原題はPublished registers and texts of education）。タイトル通り、イギリスでこれまで出版されてきた教育学の刊行物、テキストの変遷とその展開の概観から、教育学（educational studies）／教育学研究（educational research, education research）の歩みと広がりを記述しようと試みた章である。

この章は、「テキスト（textbook/texts）」の定義から始まる。英国教育研究協会（BERA）の初代会長であるジョン・ニスベット（John Nisbet）によると、テキストとは「新しい研究を報告し新しい概念を紹介するようなものではなく、研究の手順な調査、実験をレビューし要約した本」である（p.149）。続けてニスベットは「テキストは学生や教員のため、定義されたある研究分野への入門として執筆される」と解説する。ここで筆者は「text」をどう訳すか、という大きな壁に当たることになった。ニスベットの記述からtextとは教育学を学ぶ学部学生の教科書が想定されるわけだが、日本語で「教科書」といった場合、学校教育段階の授業で使われる「教科用図書」が浮かぶ方が大半であり、大学生向けの学術入門書を思い浮かべる方は少ないであろう。さらに、「テキスト」の役割について、ニスベットは「新しい学問をつくり、その境界を定めて内容を具体化し、研究の進展とともに新しい内容が加わっていくことを正当化する」（p.149）と述べている。すなわち、ニスベットはこのtextの存在そのものが教育学を学問たらしめると述べており、著者らの思惑もまさにここにあることから、textはそのまま最終的に「テキスト」とさせてもらった。本章は、このニスベットの記述通り、教育学のテキストの質的・量的進展と新しい内容の広がりをマッピングする試みなのである。

この章を訳すにあたり、何より大変だったのはこのイギリスの教育学の歴史的基礎文献について私の知識が足らず、読んだことのない書籍がほとんどだった点である。実にこの章そのものが教育学研究の歴史を網羅する基礎文献に関する総覧のようなものであり、書名が挙げられている以上、その内容について全くわからないままタイトルだけ訳すわけにはいかない。しかし、既に入手できない書籍も多く、どこかで引用されている文献を探しつつ、当該文献がどのようなものなのかについて紐解いていく必要があった。

加えて、人名である。やはり本章の翻訳作業をきっかけにそれぞれの研究者を当たることになったが、これが本当によい勉強になった。本章は教育学研究を網羅する試みだけに、限られた紙幅の中で誰の文献が取り上げられているのかだけでも一見の価値はあるだろう。限られた紙幅と言っても本書で取り上げられている人物は非常に多く、人名索引だけでも6頁にわたる。この固有名詞の和訳に関しては、監訳者の三時眞貴子氏が全編を通して特に気を遣われた部分であろう。コロナ禍で直接お目にかかっていたの打ち合わせは出来ず仕舞いであったが、メールで何度も討論を重ねた部分である。

翻訳の難しさについては、会員の皆様も頭を痛めた経験がおありのことと思う。内容を理解することとそれを適切な言葉に置き換えることは別物である。邦訳が出版されていない重要文献のタイトルを訳すというのは大変困難な経験であった。用語ひとつ取っても何の言葉を当てるか迷うものであるが、それが本のタイトルとなると難易度は一気に跳ね上がる。しかも、本章に

挙げられた書籍はこの領域の金字塔といってもよい重要文献である。内容を適切に表現しているかどうか、前述したように既に内容を確認することができない書籍もあるのである。ちなみに、本訳書のタイトルは『イギリス教育学の社会史——学問としての在り方をめぐる葛藤』であるが、原題には副題はついていない。この副題は私がつけたものではないが、これだけでも監訳者の苦勞と葛藤を感じていただきたい。

我々が「イギリスの教育」のテキストといった場合、教育に関係する領域における制度の概要や歴史、教育機関や社会・文化的背景などに焦点が当たるのが一般的ではないだろうか（本学会で編著刊行した『英国の教育』もご覧いただきたい）。しかし、本書は、特に本章はこれまでおそらく類を見ない教育学のテキストや刊行物に焦点を当てた「教育学研究史」である。本章で明らかにされたマップからは、教育学のテキストは教師教育のためのテキストだけではない、という事実が浮かび上がってくる。しかし、実際イングランドにおいては教育学のテキストは教師教育を始点としている。高妻会員も言及しているよう、教員養成と教育学は、イギリスにおいても日本においても複雑な事情が絡みながら発展してきている。教育学のテキストの歴史から教育学のあり方を垣間見ることができるのである。

実は、私は学部と修士課程では教育学を専攻しておらず、また教員免許も持っていない。そのため、所属先の教職課程では多少なりとも肩身の狭い思いを感じることもあるし、教育学の学問的知識の薄さを感じるが多々ある（そのため、第6章の基本的文献もほぼ読んでいない、ということになるのだが）。高妻会員が言及している「教員養成と教育学研究を両端にしたグラデーションのある教育学」からも外れているわけである。しかし、本書の主な議論である「教育学の学際的アプローチ」からは、こうした教育学以外の学問背景を持つ者が、どのように教育学のマップに寄与するかというのは重要な論点になるであろうと、自身のアイデンティティを模索する中で一筋の光明を見出した思いがした。しかし、本書でも議論されているように、「学際的」発展とは単純で平坦な道のりではなく、今後の重要な教育学研究の課題のひとつであることは間違いないであろう。

この書籍は「教育学とは何か」という問いに真っ向から挑んでいる。著者らが述べているよう、「イギリス全体の教育学について書かれたものは、これまでほとんどなかった」（p.3）。それがなぜなのか、また本書を通して何が明らかにされたのか、ぜひ一読いただきたい。イギリス教育研究を専門とされる方だけではなく、教育学の基礎文献としても必読の書であろう。

白幡真紀（仙台大学）